

くなってきていると思われる。筆者は、成人期の発達の危機をエリクソンの発達の危機の概念に加えて「これを通過しないことには先へ進めない」という個人内の心理的岐路の意味をも含めてとらえ、その危機を解決すれば自己の世界は拡大し、人格は統合・成熟していくが、未解決・中途半端な解決であれば、それまでと同じレベルが退行したレベルにとどまってしまうことを示唆した。今日の社会的潮流に耐える発達課題は、このようなより個人内的・人格的次元で考えられるべきであろう。例えば、成人女性の同一性危機の現れ方やその解決の方向は多様であるが、同一性の模索や葛藤の解決という次元では共通の課題を有していると思われる。

以上の見解をまとめると、成人期の発達課題とは、個人の心理的岐路に際して「その内的な危機を認知し、それを主体的に解決すること」であろう。このような課題は、人生の特定の時期に何度か繰り返され、その課題の達成によって人格はさらに成熟していくと考えられる。

教育現場の取材を通して

村上 義雄

新聞記者としての取材活動から得られた「子どもたちの肉声」をもとに、今、教育の現場でどのような問題が生じているのかを話してみたい。取材という行為によって聞きとってきた人々の肉声は、時に激し過ぎることもあるが、それだけに実在的に現状を伝えてくれるものと確信しているからである。

「学校なんて大嫌い。みんなで命を削るから。先生はもっと嫌い。弱った心を傷つけるから。」といった遺書を残して自ら死を選んだ中3の少女。服装や髪形といった外見から「問題児」と烙印をおされ、教師による集団暴力を受け、「くさったミカン」と罵られた女子中学生。「学校は嫌なことばかり、良いことは1つもない。今、涙が止まらない。心から話しあえる友達が1人でいいから欲しかった。」と言って自殺した少年。彼にとって話し相手はハムスターしかなかった。中学3年で妊娠し母親になった少女は、セックスの意味について「あったかいことをしたかった」と話してくれた。

これらの少年・少女達にとって学校や家庭は何であったのだろうか。彼らの心の中にこうした暗いものが広がっていることを、大人たちはどれほど汲み取ろうと努力してきたのであろうか。管理教育を志向している学校現場の姿勢は、こうした子ども達に心を開こうとしてこなかったのではあるまいか。体罰という名の肉体的暴力だけでなく、言葉の暴力も少なからず存在し、さらに広範囲に深く定着しつつある「制度的暴力」はどうてい見逃

すわけにはいかない数々の不幸を生んでいるように思える。

今、学校はあまりにも「急いで」いるように思える。戦中・戦後のひもじさを体験してきた大人達は、60年代の高度経済成長によって経済第一主義の考えを確立させ、良い学校・良い会社へといった固定観念のもとに、固定的なレール乗せエスカレーターに乗せようと焦っているのではなからうか。学校の落伍者は人生の落伍者であると固定的に考え過ぎているのである。

こうした教育の現状に対して、教師・親・子ども達の3者が自由に話しあえる関係を作ることが急務であると考える。何か問題が起こってから話しあうというのではなく、日常的なレベルで話しあうことである。そのためには、その前提条件として3者の関係は対等であらねばならない。どちらか一方が優位にたつのではなく、あくまでも対等な関係を作っていかなければならない。親や教師が子ども達から学ぶこともあろう。その中で、「個人はかけがえのなく大切なものである」という考え方を定着させていくことが必要ではなからうか。今日、個人よりも全体を優位に考える態度が復活しつつあるように思われる。個人あつての全体という考えこそ、今、必要な姿勢であろう。

比較文化論的視点から

原 ひろ子

①高齢化社会と技術革新・生涯学習の時代に

かつて文化人類学者のマーガレット・ミードは、これからは「シリアル・マレージ」の時代が訪れると指摘した。離婚と結婚とが次々に繰り返されるような夫婦関係が生じるとの指摘であった。人間の生涯が長くなれば、ひとりひとりの成長のありかたも多様な様相を示すようになってくるだろうし、結婚して1人の相手と何十年も一緒に暮らしていくことが困難になるといったことを意味したのであろう。その背景には、変化することこそ成長であるといった西歐的（アメリカ的）発想があったように思われる。変化しながら成長する、若さを謳歌したいといった発想から、体力の衰えは否定的な変化であり、衰える健康を自覚することが中年以降のアイデンティティの危機であると考えようになってきたのではあるまいか。しかし、中年以降に体力が衰えるのは当然のことであり、肉体的な老いと精神的成長とは矛盾するものであろうか。世俗的欲望を超越し、俳句や短歌をたしなもうとする高砂のおじいちゃんやおばあちゃんの姿は、両者の融合を目指そうとした1つのモデルであったとも考えられる。

さらに近年の技術革新の波は日常的な家庭生活のなか

に浸透し、家庭生活にも複雑な機器が入り込むようになってきた。次々に導入される機器に対応していくためには、時に以前に覚えたことがらを洗い流して覚え直すことも必要になる。過去に学習したことについていっまでもこだわっていると、新たな機器に対応できないことも少なくない。こうした状況から、一端身につけたことを洗い流して新しいことを吸収するといったライフ・スタイルが登場してくる。時代の変化や社会の変化が急激になればなるほど、こうした柔軟な対応が重要になってくる。

②主体的発達課題と情報

従来の学校教育は、「社会生活をしていくために将来必要になることを教える」といった発想が教える側の主要な論理であった。教えられる側は、教える側が想定したきまりや基準を絶対的なものとして受け止め、受け身的に専ら吸収していくことが最善であるとされていた。しかし、教えられる側のひとりひとりが持っている課題に対して、どのように対応していくのかといった発想が必要ではなからうか。さらには、課題そのものを模索す

る姿勢も大切である。そのための情報の提供が考慮されなければならない。従来の常識的で固定的な枠にはまることなく、一見はずれているように見えるけれども様々な生き方をしている人々についての情報を提供していくことが必要である。そのためには、多様な情報收拾能力が教師に問われることになる。それぞれの子どもにとって一番大切なものは何であるのかをきちんと言える教師でもある。

③主体的発達課題と人的ネットワーク

教師が多様な情報を提供していくためには、教師自身幅広い生き方をしていくことが必要となる。従来の教師のなかには、あまりにも生きている世界が狭かった教師が少なくない。少なくとも、自分とは異なった世界とのつきあいが必要になる。こうした世界の人々についての情報を提供していくために、教師の人的ネットワークを広げていくことが大切であり、そのための制度的保証も必要になってくる。